土器・瓦 49

嵯峨朝の緑釉軒瓦

－平安宮中和院・東寺・西寺－

http://www.kyoto-arc.or.jp
(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　平安宮中和院出土の緑釉軒丸瓦

写真２　東寺出土の緑釉軒丸瓦

写真３　平安宮中和院出土の緑釉軒平瓦（京都文化博物館所蔵）

はじめに　平安宮では、主要な施設に緑釉瓦が使用されています。軒先の緑釉軒瓦の型式は、大極殿（だいごくでん）・豊楽殿（ぶらくでん）と中和院（ちゅうかいん）の所用瓦に大別されます。これらは生産された時期や、型押しして文様を表す笵（型）が異なります。大極殿・豊楽殿の緑釉瓦は遷都当初の桓武朝にあたります（リーフレット京都 No. 425 参照）。一方、写真１・３の緑釉瓦は、出土例は少数ですが、中和院の複数地点で認められます。ここでは、中和院所用瓦として注目してみます。

瓦笵の移動と緑釉瓦生産　中和院は、内裏外郭に位置し、神事を行う施設です（図１）。写真１・３の緑釉瓦の出土が知られ、栗栖野（くるすの）瓦窯（図２）で生産されたことがわかっています。写真３と同じ栗栖野瓦窯産の緑釉瓦は、東寺・西寺でも出土しています。なお、東寺では、別の笵による緑釉瓦も出土しています（写真２）。

ところが、写真１・３と同じ笵を用いた瓦は、西賀茂瓦窯でも生産されています。西賀茂瓦窯では施釉しない普通の軒瓦として生産され、平

安京へ供給されています。写真３と同笵の西賀茂瓦窯産軒平瓦は、朝堂院延禄堂、豊楽院で出土しています（写真４・５）。

瓦の笵は木製で、製作の頻度が増すと傷が生じます。そこに粘土が押し込まれて、製品には傷が反映されます。写真４と５を比較すると、後者で木目状の傷が生じています。つまり、写真５の瓦の生産は写真４よりも後であることがわかります。『日本後紀』によると朝堂院は、延暦 16 年(797)には完成しており、豊楽院の主要な建物の完成は、延暦 24 年(805)頃に推定されます。したがって、これら施設の完成の先後関係と、瓦の生産の順序は整合的です。そして、これら朝堂院や豊楽院への供給を担った生産地が西賀茂瓦窯だったわけです。

では、緑釉瓦はどうでしょう。西寺から出土した、写真３と同笵の瓦（写真６）を比較してみます。表面には釉薬が施されていますので、細かな傷は確認できませんが、下外区の珠文の周囲に大きな傷が生じています（写真４～６、○印の箇所を比較）。

これらの関係は、朝堂院・豊楽院の完成後、西賀茂瓦窯から栗栖野瓦窯へ瓦笵が移動し、緑釉瓦として生産されたことを示しています。その時期は、桓武朝の造営が一段落した延暦 24 年以降、つまり嵯峨朝に求められます。

写真４　朝堂院延禄堂出土の軒平瓦

写真５　豊楽院出土の軒平瓦

写真６　西寺出土の緑釉軒平瓦

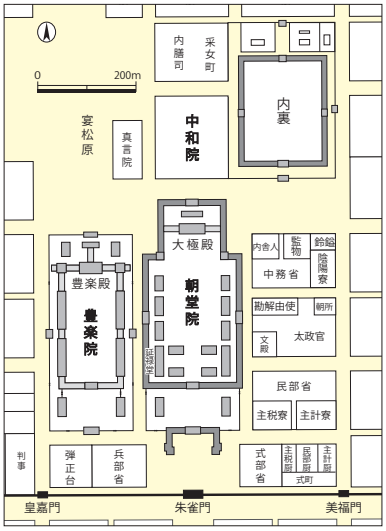

図１　平安宮の中枢施設

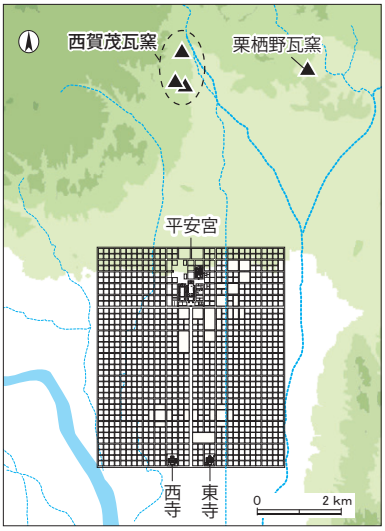

図２　平安京と瓦窯の分布

おわりに　東寺・西寺では、弘仁４年（813）正月に、法会（夏安居）を開始することが決められています。遷都後、東西二寺がようやく機能しはじめたことを示しています。緑釉瓦もこの頃に供給されたとみられます。また、中和院の緑釉瓦の供給もこの頃に求められます。

嵯峨朝における緑釉瓦の生産と供給は、神仏の宗教施設の造営を目的としていたのです。桓武朝を引き継いだ嵯峨朝の造営のあり方を探る上で注目されます。

（京都府文化財保護課　古閑正浩）